

令和3年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 3【号】



記号化した事象の再認識

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

先日、車を運転しているとき、危うく交通違反をしてしまうところだった。走り慣れているいつもの道路ということもあり、「一時停止」の標識を見落としてしまったのだ。いや、正確にいうと見落としたというわけでもなかった。いつもの見慣れた風景に、「一時停止」の標識が溶け込んでいて、視界には入っているが私の意識の中ではっきりとそれが認識されなかったのだ。つまり、見えているけど、見ていなかったのである。

見えているけど、見ていない……。そのような事象は、日常生活の中に案外多く潜んでいる。それは、繰り返し何度も目にすることによってすっかり見慣れてしまい、それが「目印」や何かを表す「記号」のようにしか感じられなくなり、改めて見つめなおしたり、考えてみたりすることがなくなるという経験である。そしてそれらは、何かのきっかけに出会わないとなかなか再認識されることがない。

この園だよりの「雪月花」というタイトルもそうだ。私は当初、年長・年中・年少の各クラスを表す「雪」「月」「花」というそれぞれの文字を順番に並べてそれをそのままタイトルのようにしていると思っただけで、それ以上のことは考えなかった。そんなある日、カーラジオから流れていた曲を聞くともなく聞いていたとき、曲終わりにパーソナリティが言った「今の曲は、『雪月花』でした」との言葉に軽い衝撃を受けた。「雪月花」という言葉自体があるということ、恥ずかしながらそのとき初めて知ったのである。

「雪月花」には次のような意味がある。

- ・ 四季おりおりの風雅な景色、眺め。
- ・ 四季の自然美の代表的なものとしての象徴。

また、調べると「雪月花」の語を用いた作品で必ず挙げられるのが白居易の詩の中にある「雪月花時最憶君」というフレーズである。これは、「雪月花の時、最も君を思う」と訳される。概ね「風雅な景色に接したとき、その景色を君と一緒に楽しみたい」といった意味内容で紹介されている。

本園の園児は、四季折々の良いもの、美しいもの、つまりは「雪月花」に触れ、その都度楽しんだり喜んだりしている。そのような園児の様子のひとつひとつの場面が私たちにとってのいわば「雪月花」である。

「見えているのに見ていない」ということがないよう、園だよりのタイトルが示す意味を改めて噛みしめたい。

